

# 図書館だより

BUNKA GAKUEN LIBRARY

文化学園大学・文化ファッション大学院大学・文化服装学院・文化外国語専門学校  
東京都渋谷区代々木3-22-1 TEL.03-3299-2395

No.180

文化学園図書館

2026年10月23日発行

## 私を創った本 教員編 第4回

今号は「私を創った本 教員編」第4回として、文化学園大学国際文化学部先生に本を選んでいただきました。

「私を創った本」とは…？

ファッション界をはじめ、各界で活躍されている方から、考え方や人生に大きな影響を与えた本を教えてください、図書館内で展示する企画です。その本を読むことで、学生の皆さん自身の未来を創るためのインスピレーションや気づきになってもらえればという思いで行っています。

### 2025年度以降の「私を創った本」

|      |                                           |
|------|-------------------------------------------|
| 第6回  | BEAMS PLUS チーフバイヤー<br>金子茂さん(文化服装学院卒業生)    |
| 第7回  | 作家・編集者・写真家<br>都築響一さん                      |
| 第8回  | 現代美術家・ジュエリーデザイナー<br>スズキエイミさん(文化学園大学卒業生)   |
| 第9回  | 映画監督<br>内山拓也さん(文化服装学院卒業生)                 |
| 第10回 | クリエイティブディレクター<br>高橋悠介さん(文化ファッション大学院大学卒業生) |

2025年度、第6回はBEAMS PLUS チーフバイヤーの金子茂さんに、第7回は作家・編集者・写真家の都築響一さんに、第8回は現代美術家・ジュエリーデザイナーのスズキエイミさんに選んでいただきました。第6回・7回は、関連イベントも館内で行いました。

2026年度の第9回は映画監督の内山拓也さんに、第10回はクリエイティブディレクターの高橋悠介さんに選んでいただきました。

ご自身でお持ちの書籍や作品などを展示のためにご提供くださる方も多く、いずれの展示も学生の皆さんに大変好評でした。



展示風景(第7回)



展示風景(第8回)



展示風景(第9回)

家で洋裁や和裁をしていた母がいつも身近におり、子供のころから手作りの服を着せてもらうことや、布地やファッション雑誌が身近にあることが当たり前の環境で育った。そのため、将来は服に関わる仕事に就きたいと思うようになったのは、ごく自然なことだったように思う。学生時代は日本のアパレル業界も活気にあふれ、海外のファッションも数多く紹介される時代だった。

そんな中、何冊かデザイナーの書籍を読む機会があり、その一冊がソニア・リキエルの『裸で生きたい—ソニアのファッション哲学』である。読み始める前は、「人の体を覆う服をデザインする人が、なぜ『裸』なのだろう」と不思議に思いながら手に取ったことを、今でもよく覚えている。

ソニア・リキエルといえば、赤毛にスリムな体、そしてニットをまとい「ニットの女王」と称されたデザイナーである。当時の私には、彼女の言葉のすべてを理解することはできなかったが、服に対する向き合い方の一端に触れることができたように感じた。

その中でも特に心に残っているのは、「服は作ることで完成するのではなく、人が着ることで初めて服となる」という考え方である。この言葉は、現在、学生の着装発表を見る時に改めて伝えている。また、「衣服をまとっていても、その内側にある身体は、外からは見えない別の存在である」という考え方にもなぜか大きな衝撃を受けた。同時に、不思議な心地よさも感じたことを今でも鮮明に覚えている。その感覚は、今なお私の中に残り続けている。

もう一つ、私にとって大切な本が、敬愛するデザイナー・金子功氏の『金子功のピンクハウス絵本』シリーズである。色とりどりのプリント生地、ピコミシンを施した共布のフリルやリボン、そして巧みな重ね着。その一冊一冊は、写真集でありながら、金子氏の美意識が凝縮された作品集でもある。

初めてのお給料で購入したPink Houseのブラウスは、金子氏の作品の中では比較的シンプルなデザインだった。それでも私にとっては何よりもうれしい一着で、何度袖を通したか分からないほど大切に着続けた。

このシリーズは全6冊刊行されているが、どの本にも金子氏のこだわりが詰まっており、「かわいい」と「美しい」が余すことなく表現されている。当時、関西からコレクションへ向かう新幹線は、関西のスタッフや顧客であふれ、その華やかさから「お花列車」と呼ばれていたという。私自身も何度かコレクションを訪れる機会に恵まれたが、会場全体を包む華やかな空気と、ランウェイで作品を目にし

たときの高揚感は、今でも忘れることができない。この写真集は、「大好きな服は、眺めているだけでも楽しい」ということ、そして「長く大切に着たい服とは、流行に左右されないベーシックな服ではなく、自分が心から好きだと思える服なのだ」ということを教えてくれた。

今では、そのような服に出会うことは以前より難しくなったのかもしれない。しかし、デザイナーとしての活動を終えられた今でも、金子氏が生み出した作品と、この6冊のシリーズが持つ「かわいい」は、私の中で色あせることなく存在し続けている。



ソニア・リキエル著、吉原幸子訳  
『裸で生きたい: ソニアのファッション哲学』  
文化出版局(1981)(現在、絶版)  
<593.049/R>



金子功著『金子功のワンピース絵本』、『金子功のブラウス絵本』、  
『金子功のジャンパー絵本』、『金子功のプリント絵本』、  
『金子功のピンクハウス絵本』、『金子功のピンクハウス絵本II』  
文化出版局(1984-7)(現在、絶版)<593.087/K>

しばた さなえ  
柴田 早苗

文化学園大学 国際文化学部  
国際ファッション文化学科 教授

文化女子大学短期大学部専攻科  
被服専攻修了  
2005年フォーマルウェア協会ゴール  
ライセンス取得



【業績(主要著作・論文・作品など)】

著書

(共著)『服装造形学 技術編I』文化学園教科書出版部(2000)  
(共著)文化学園服飾博物館編『世界の伝統服飾』文化出版局(2001)

論文

『装飾技法ピンタックについて』『文化女子大学紀要』第36号(2005)

作品

本学教員研究作品展において第14回より継続的に出品(1999～)

ファッションデザインにおいて、最も魅力的でありながら頭を悩ませるのが「アイデアの発想」です。私が担当する授業「デザインワークアウト」でも、いかに個性的な面白い発想を導き出すかを学生とともに探求しています。

デザインのアイデアは、決してゼロから突然生まれるものではありません。水野学氏の『**アイデアの接着剤**』は、「アイデアとはすでに存在する要素と要素の組み合わせ（接着）である」という本質を明確に教えてくれた一冊です。自分の中にある知識や体験の引き出しをいかに増やすか、そしてそれらをどう面白く掛け合わせるか。この思考法は、私自身の研究や作品制作、そして教育の根幹を支える指針となっています。

では、私自身は何と何を「接着」しているのか。その第一の要素が、自分の手で地道に素材と向き合う「クラフトワーク」です。クラフト学園研究室『**革の技法 楽しむための基本集**』をはじめとする伝統的な手仕事の技法書は、素材の肌触りや構造、そして手技の積層が持つ圧倒的な存在感を伝えてくれます。どれほど時代が進んでも、自分の手を動かし、物理的な素材の抵抗感を身体で覚える体験は、ものづくりの揺るぎない土台です。

そして、その手仕事と対極に位置する第二の要素が、最先端のデジタルテクノロジーです。オランダのデザイナー、イリス・ヴァン・ヘルペンの大回顧展図録『**Iris van Herpen: Sculpting the Senses**』は、その極致を見せてくれます。3Dプリントやレーザーカットを駆使した未来的かつ有機的な造形美は、服の概念そのものをアップデートする衝撃に満ちています。私自身も、カッティングマシンやコンピューターミシンなどのマシンワーク、生成AIや3Dプリントといった「デジタルとファッションの掛け合わせ」を研究テーマに掲げていますが、彼女の図録は「技術と表現美が高度に融合した先の可能性」を常に突きつけてくれます。

「地道で密度の高いクラフトワーク」と「革新的なデジタルファブリケーション」。一見すると正反対にあるこの二つを、発想法によって自分の中で「接着」させること。それこそが、新しいファッションの表現を生み出す原動力です。服作りとは、技術を使うことだけでも、手を動かすだけでもありません。未知の要素同士を自由に往来し、楽しんで接着させたときに、まだ見ぬデザインが誕生します。

図書館は、みなさんにとっての「接着のタネ」が無限に眠る場所です。ぜひ本棚を巡り、自分だけの新しいクリエイションを芽吹かせてみてください。



水野学『アイデアの接着剤』  
朝日新聞出版(2010)  
〈674.3/M〉



クラフト学園研究室  
『革の技法 楽しむための基本集』  
日本ヴォーグ社(2006) 〈755.5/K〉

都合により、  
表紙画像の掲載は  
割愛しています

Iris van Herpen『Iris van Herpen: Sculpting the Senses』  
Lannoo(2023) 〈593.087/H〉

かとう じゅんのすけ  
**加藤 淳之介**  
文化学園大学 国際文化学部  
国際ファッション文化学科 助教



文化ファッション大学院大学  
ファッションビジネス研究科  
ファッションクリエイション専攻  
ファッションデザインコース首席修了

【業績(主要著作・論文・作品など)】  
外部講演  
中国・江西服装学院 国際シンポジウム「数智赋能运动时尚  
创新设计国际学术会议」基調講演  
「Generative AI and Fashion Design: Educational  
Case Studies」(2025)  
発表・出展  
文化学園大学 学内研究発表  
「プロシージャル3DCG手法を用いたファッションデザインの  
新しい展開」(2025)  
「3DCGを用いたファッションデザインのためのツール開発・  
作品制作 ①～⑥」(2019～2024)  
「刺繍ミシン活用の可能性」(2017)  
文化学園大学 教員研究作品展(2012、2015、2019、  
2024、2025)  
受賞・入選  
TOKYO AI Fashion Week 2025 S/S Contest ノミネ  
ート(2025)  
ナゴヤファッションコンテスト2016 グランプリ(2016)  
第88回 装苑賞 最終審査会 会場人気投票1位(2014)  
YKKファスニングアワード 審査員特別賞(2011)  
第8回 文化服装学院ファッションデザインコンテスト メンズ  
部門 大賞(2011)

私がミシェル・フーコーの『監獄の誕生』、そして『性の歴史Ⅰ— 知への意志』という本に出会ったのは大学生のころでした。漠然と文化遺産の研究をしようとジャンルは問わず様々な本を読み漁っておりました。そんなときでした。

それまで私にとって「権力」とは、上から押さえつけ、何かを「禁止し、抑圧するもの」でした。ダメだと言われるから反発したくなる、まるで子供の反抗期と同じような構図です。しかし、フーコーの著作に触れ、私のその無邪気な認識は完全に覆されました。

「権力とは、抑圧するだけでなく、何かを『生み出す』ものである」

この視点の転換は、比喩ではなく、後ろから頭をバットで思い切り殴られたような（実際にそんな経験はありませんが）、それほど強烈な衝撃でした。フーコーは、近代の権力が人々をただ罰するのではなく、人々の「生」を管理し、健康や富、知識、そして欲望そのものを「生産」していく構造を暴き出しました。国家は人口を増やし、経済を豊かにするために、人々を「生かす」権力を振るうのだと。あまりの知的興奮で、しばらくは、いえ、今もずっと私はこの考え方に取りつかれているのです。

この「生み出す権力」というレンズを通すと、私が現在専門としている世界遺産や文化財の研究も、まったく違った風景に見えてきます。

世界遺産条約は、名目上は貴重な遺産を破壊や開発から「守る（＝制限する）」ための条約です。しかし実際には、世界遺産を生み出すための条文が存在します。「守るために生み出す」という極めて特異な条約です。そして、ユネスコや国家というシステムは、「世界遺産」という新たな価値とブランドを『生み出し』、それを消費する巨大な観光需要を『生み出す』ことに積極的に関与していきます。世界遺産委員会での登録を巡る議論が時に不毛に感じられるのも（実際に不毛なのですが）、それが純粋な文化の保護というよりも、どの遺産に世界的な「価値」を与え、新たな資源としての価値を生産するかという、権力ゲームの側面を持っているからです。

世界遺産が増えれば、観光への需要が生まれ、経済が豊かになる。少なくとも多くの国家はそう信じて疑いません。その結果生み出されたのが、昨今世界中で問題となっているオーバーツーリズムです。もちろんすべてが世界遺産のせいではありませんが、「保護」という名目で生産された価値が、皮肉にも遺産そのものを脅かすほどの人の波を押し寄せさせる事態を招いているのです。

物事の背後にある、目に見えない「生み出す」構造に気づくこと。フーコーの著作は、表面的な事象を疑い、文化遺産や観光、そして社会のシステムを根本から問い直す視座を私に与えてくれました。学生の皆さんにも、ご自身の心地よい「当たり前」を打ち砕いてくれる、そんな鈍器のような本との出会いがあることを願っています。



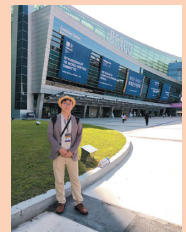
ミシェル・フーコー著、田村侃訳  
『監獄の誕生 監視と処罰』（新潮社刊）  
（1977）〈326.4/F〉  
※書影は新装版（2020）



ミシェル・フーコー著、渡辺守章訳  
『性の歴史Ⅰ 知への意志』（新潮社刊）（1986）  
〈141.74/F/1〉

#### おさじま だいご 箴島 大悟

文化学園大学 国際文化学部  
国際文化・観光学科 助教



筑波大学大学院人間総合科学研究科世界文化遺産学専攻博士後期課程修了。世界遺産条約などの国際法をはじめ、文化遺産の観光活用について関心を持つ。その後、神田外語学院、東京ホスピタリティアカデミーの非常勤講師を経て、現職。

#### 【業績（主要著作・論文・作品など）】

審査付論文

箴島大悟・伊藤文彦「文化遺産の機能に基づく活用について—明治村と日光江戸村の比較を通じて」『遺跡学研究：日本遺跡学会誌』22号（2026）

箴島大悟・伊藤文彦「無形文化財及び無形民俗文化財の登録制度の論点」『文化政策研究』第16号（2023）

（単著）「文化遺産及び自然遺産の国内的保護に関する勧告の意義」『文化政策研究』第14号（2021）

（単著）「世界遺産条約におけるクライテリア草案の分析」『文化資源学』18巻（2020）

箴島大悟・伊藤文彦「第42回世界遺産委員会からみる世界遺産条約履行上の問題点の分析」『世界遺産学研究』6号（2019）

箴島大悟・真鍋沙由未「戦前における皇室による保護から戦後の法的保護へ—無形文化財における保護概念の成立過程その1」『日本建築学会計画系論文集』751号（2018）

（単著）「世界遺産と無形遺産—交錯する二つの条約とその問題—」『文化資源学』15巻（2017）

不明な点は下記にお問い合わせいただくか、ホームページをご覧ください

〔TEL〕03-3299-2395 〔URL〕<https://lib.bunka.ac.jp>

Xとfacebookにて図書館の情報を発信しています

〔X〕<https://x.com/bunkalib> 〔facebook〕<https://www.facebook.com/lib.bunka>



文化学園は、2023年に創立100周年を迎えました。記念ロゴマークは、本学園の学生がデザインしました。